

早稲田大学ラグビー蹴球部における二人の監督のリーダーシップスタイルの比較 Leadership style of two Head Coaches – Comparative study in Waseda Rugby Football

1K08B207-8 村松 賢一

主査 武藤泰明 副査 石井昌幸

【目的】

早稲田大学ラグビー蹴球部は10年間の間で5回の大学選手権優勝を達成している。大学選手権決勝に残った回数は10年間の間で9回、そして私が所属している期間中にも大学選手権優勝・準優勝をそれぞれ一回ずつ達成した。10年間の間で、部の監督、つまりリーダーの役割を担う人間は3度変わっている。それは清宮克幸氏、中竹竜二氏、辻高志氏である。常に大学ラグビーの覇権を争ってきた部だが、その3名のリーダーシップスタイルは大きく異なっている。筆者自身、早稲田大学ラグビー蹴球部に所属し、この四年間は筆者を人間として大きく成長させ、23年間の人生で最も真剣にある一つのことに対して取り組んできた期間であると断言できる。筆者は、2008年度から入部し、中竹竜二氏と辻高志氏の二人の監督の指導を2年ずつ受けた。本論文では筆者が直接指導を受けたことのあるこの両者のリーダーシップスタイルを明らかにし、大学ラグビートップレベルの成績を残してきた要因をそこに見出し、理想とするリーダー像がどのようなものであるのかをここに提言したい。

【方法】

本論文は両者のリーダーシップのあり方を三隅二不二が定説したPM理論をもとに文献調査、インタビュー、アンケート調査によって明らかにした。第一章では本論文の研究背景と研究目的を明言し、第二章では先行研究であり、リーダーシップ理論の歴史の変容と定義、三隅氏が提言したPM理論についての研究についての考察をした。第三章では比較対象として中竹竜二氏と辻高志氏をあげ、さらに比較観点として大まかに「リーダーシップスタイル」「早稲田大学ラグビー蹴球部における指導方法・指導スタイル」「監督が目指すチームスタイル・戦術」「ラグビー指導以外での指導」の4つの比較観点をあげた。第四章では、文献調査とインタビューから第三章で

あげた4つの比較観点を明示し両者のリーダーシップスタイルを明らかにした。第五章ではインタビュー調査を行った結果を示しその考察を行った。第六章は本論文のまとめと、参考文献、参考資料、まとめと謝辞である。

【結果】

両者のリーダーシップスタイルは、文献調査・インタビューとアンケート調査から全く異なるものであるということが分かった。中竹竜二氏はM要因の強いリーダーシップを発揮しており対して辻高志氏はP要因の強いリーダーシップを発揮していた。前者が人間関係重視型のリーダーシップスタイルで後者が指示型のリーダーシップスタイルである。しかしながら両者に共通する側面も見出すことができた。同じ組織で全く異なるリーダーシップスタイルを発揮している両者だが、共通して大学ラグビーの覇権を争うレベルのチームを作り上げてきたというのは周知の事実である。

【考察】

以上の結果を踏まえ、中竹氏、辻氏の両者のリーダーシップスタイルは異なるものであると明らかにした。しかしながらどちらのリーダーシップが正解であるという結論には至らなかった。両者のもつリーダーシップスタイルの特性を発揮することで組織やチームを良い結果に導いていくのである。三隅氏のPM理論によればP要因もM要因においても強いリーダーシップスタイルを発揮する指導者が優れた指導者であるとされている。今回は部監督を研究対象に取り上げたが、部の中枢を担うコーチ陣の中に、今回取り上げた二人のリーダーシップスタイルとは違う指導スタイルをとる人物が存在し、監督一人では発揮できなかったリーダーシップ要因を発揮していたのかもしれない。P、M要因それぞれの兼ね合いのバランスが組織経営にもたらす影響は重要な問題である。